

## Boa Deconstructor の再臨

三原 芳秋

「海外新潮」の歴史は、思いのほか浅い。その前身「海外動向」が鳴り物入りで始まったのが1980年。スタメンの一人、故・出淵博は、第二打席に「Deconstructionismの波動」(出淵博著作集2『批評について書くこと』(2001)所収)をはなつ——「一頭の怪獣が大西洋の兩岸を徘徊している。Deconstructionismという名の怪獣が。英米批評界の古い権威は……対立を深めたまま、怪獣‘Boa Deconstructor’<sup>1</sup>を遠巻きにして、いろいろ詮議している」。それから四半世紀余り。「理論は終わった」と(あたかも「理論」などなかったかのように)「古い権威」が「文学」をふたたび呪物化するかと思いきや、「文学はすでに脱構築された」と(あたかも「文学」などないかのように)「新たな権威」が「理論」を道具化する。「どのような実を結ぶか」と出淵が期待をこめて語った「Deconstructionistsとの対決」は、結局死産(still-born)に終わってしまったのだろうか。怪獣Boaは、いまや、ゴム製のヘビの玩具


のようだ。そして、ときおり、尻尾を<sup>ターン</sup>転回させたりもする。  
Turning and turning...

「制度化」という手ごろな表現もある。北米の「文学科」的脱構築受容に大きく寄与したJonathan Cullerの*On Deconstruction*は「25周年版」(2007)が出版され(おかげで邦訳も今年文庫化され)たが、そのしばらく前にCullerが編集した全4巻のアンソロジー*Deconstruction*(2003)のラインナップをみると、「文学理論・批評」から「建築」まで、その「制度化」の進捗ぶりには舌を巻くばかりだ。さながら、狙った獲物は逃さないfalconといったところ。その翌年、the falconerはこの世を去る。

2004年、Derrida他界。まずは思い出話の交換があり(*PMLA*(March 2005)など)、その後英米各地の「理論」の中心地<sup>センター</sup>では、より本格的な故人の思想をめぐるシンポジウムが多数開催されたが、それらの成果が、ここ一、二年相次いで書物の形になっている。コーネルのそれは*diacritics*の最新号(“Derrida and Democracy”)として、パークレイのそれは*Derrida and the Time of the Political*(2009)として、またロンドンからは*Derrida's Legacies*(2008)として。いずれも「後期」Derridaの思想——「倫理」「政治」「民主主義」など——に比重があることは言うまでもない。「文学科」の遺産はどこへ行ってしまったのだろうか。

Spivakは、いつも、「文学の教師」として語る。大著*A Critique of Postcolonial Reason*(1999)は、あえて恩師de Manの幽霊を憑依させ、「脱構築の二段階」(tropologicalと

<sup>1</sup> *Deconstruction and Criticism*(1979)序文において、Hartmanが、Derrida, de Man, Millerにつけたあだ名。



performative) という戦略を (行為に開かれるかたちで) 徹底させることにより、その文体の晦渋／怪獣性は際立ったものになっている。たとえば、帝国主義の遺制を脱構築するために hybridity や diaspora を称揚する理論や実践が、〈北〉に居住する移民の／による代理表象を特権化することによって、かえって〈南〉をかき消すような「帝国主義的嘘」を遂行してしまうことを暴露し、ネイティヴ・インフォーマントの (不) 可能な視点から (第二の、絶え間ない) 脱構築をくりかえすことによって、(permanent parabasis —— くりかえし廻ってくる第二打席——「すでに、つねに、いまここに」到来する再臨 (Second Coming)。) 「文学」の自明性に安住する者も、「文学」の普遍性を脱構築したとして多文化主義を安易に称揚する者も、同様に嘘をついている。「理論」の抵抗を極端にまで推し進めたはてに、Spivak が、それらの嘘に共通するのは “a lack of respect for the singularity<sup>2</sup> and unverifiability of ‘literature as such’” だと、一見こともなげに言っていることの意味を、よくよく考えてみなければならない。

Boa Deconstructor slouches towards Literature —still to be born.

(同志社大学講師)

---

<sup>2</sup> この小文を書いたのち、デリダと文学の問題を包括的に扱う一冊の書物を手にとった (青柳悦子『デリダで読む『千夜一夜』』(2009))。著者は「英米」での singularity 賛美に肘鉄を食らわせることに「使命感」をもっているらしい。これは興味深い指摘である。Spivak はどうだろう。「英米」や「大西洋の両岸」という範疇にはどうにもおさまりの悪い、この parabasis としての「文学の教師」は。